



ザルツブルク市内の病院待合室に
併設されたギャラリーでの展覧会
(2004年撮影)

自分をとりもどす 「場」としてのアート

絵を描きながら、アートは、制作そのものが誰かを癒したり、勇気付けたりするひとつの営みになりえるのではないかと、自分に問いかけることがあります。それは、私自身が、「ああ、その色いいね」、「これ、どうする？」という、その時、そばにいてくれた誰かの働きかけによって、それまで心の中で固まっていたものが解きほぐされ、自分らしさを取り戻せる瞬間があるからです。

私はそこでまた新しい自分を見つけ、描き続けることができます。

「できること」で繋がる

ひとりには、荷が重過ぎると感ずるとき、そこにいる人が自分のできることで繋がり開かれていくことはできないでしょうか？

背が高い人は、高いところにあるものを、手の届かない人のためにとってあげられます。眼の悪い人は眼の悪い人に代わって、針に糸を通すことができます。でしょう。声の綺麗な人なら、唄でまわりの人を楽しませることがができます。

こうした、違いを、自分への「贈り物」として受け止めるなら、それを活かし、社会に働きかけていくことは、ある意味でのアートであり、本人が望んで授かったものではないという点では、「障がい」や「病」も同じなのかも知れません。実際、そばに寄り添うひとが、あるきっかけをつくるだけで、彼らは本当にすばらしい作品をつくり出すのです。

アートとケアの接点

「びょういんあーとぶろじえ」とは、養護関連施設のみならず、病院に展示することで、アートとケア、アートと医療、それぞれの接点をさぐる取り組みです。展示に当たっては、スタッフが知恵を出し合いながら、企画、広報、設置等を行なっています。

「びょういんあーとぶろじえ」は、養護関連施設のみならず、病院に展示することで、アートとケア、アートと医療、それぞれの接点をさぐる取り組みです。展示に当たっては、スタッフが知恵を出し合いながら、企画、広報、設置等を行なっています。



医療法人北志会
札幌ライラック病院
院長
下村 晴信

病院と患者さんとの繋ぐもの

日々の診療の中で、患者さんと医師や病院が良好な関係を築き維持していくにはと考えることがある。「医は仁術なり」という格言があるが広辞苑にはこう解説されている。「医は、人命を救う博愛の道である」。では、博愛とは？「こう解説されている。「平等に愛すること」だそうである。浅学の私であるが、医とは人を愛することが根底に流れていなくてはならないという先達の思いを感じずにはいられないし、病院と患者さんの関係

もここからゆっくり静かに湧き立ってくるもののような気がしてならない。翻って自分は、当院はどうだろうか、博愛の道を邁進しているのだろうかという自問する日々である。医療は複雑化し、患者さんも医師も病院も良好な関係を望みつつ複雑化した医療に振り回されているのではないだろうか？

そのような思いが日々強くなっていった頃、病院ロビーに、日野間さんが創作支援をされている養護施設の作品展示が行なわれた。複雑化された医療の現場に飾られた。人の目を意識していないストレートな感情表現は鮮烈で、すがすがしいものであった。立ち止まってじっと見つめる患者さんの横顔をみている時、今度、外来受診でお会いした時には、病気の話や健康管理の注意ばかりでなく絵の感想を聞いてみようと思った。残念ながらその後、お会いできていないが、今度はロビーで感想を聞いてみよう。素敵な会話ができるのである。

これまでの
びょういん
あーと
ぷろじえくと



2008年秋「映しあう/照らしあう」展



2009年(前半)「映く/かがやく」展



2009年(後半)「はしる/溢れる」展



2010年「キラキラ・ぐるぐる」展

2008年秋～2010年
びょういんあーと
ぷろじえくとは、
これまでに4回の展示を
行っています。